■研究情報

研究テーマはいかに生まれ作られていくか
――“おもしろい”と感じる感覚と，それを「他者」と共有することの大切さ――

瀬野　由衣
（2002年度児童教育学科卒業生，2010年４月より浜松医科大学　子どものこころの発達研究センター　特任助教）

キーワード：研究テーマ，“おもしろい”と感じる感覚，他者

大学院生時代からこれまで，私を支え続けてくれている研究テーマは，修士課程１年時に実験補助をしていた際，偶然，以下の興味深い現象を見たことがきっかけで生まれた。

「顔全体が隠れる大きな帽子をかぶった私の前で，子どもと実験者が三つの紙コップの一つに人形を隠した。次に，実験者は，私が人形の隠し場所を知っているか否か尋ねた。すると，３歳児の多数が「ここ！」と隠し場所を指したのである（図１参照）。一方，５～６歳児にはこのような行為傾向はみられず，「知らない」と私の心的状態に正しく言及した。」

「ここ」と指す３歳児に特有の行動は，その後，同様の実験の中で確認され（瀬野・加藤，2007）[1]，新たに考案したゲーム場面でも確認された（瀬野，2008）[2]。後者は，発達心理学会の第19回学会賞を頂けることになった，想い出深い実験でもある。では，上記の事実は発達的にどのような意味をもつのだろうか？

発達心理学では，４～５歳頃に，自分や他者がその人に固有の心的状態をもつことを理解するようになることを「心の理論」の成立と呼ぶ（子安・木下，1997）[3]。上述の研究で示された事実は，「心の理論」の成立に，行為を一時的に抑制し，自分の有する知識を心的に保持する能力の発達が関与することを示唆している。両者の関連は，国内外の研究で実証されているが，新しく課題を考案し，自分の目で普遍的な事実として「ここ」と指す現象を確認できたことは，私の大きな財産である。

図１　観察場面

博士号を取得した今，これから研究を志す方たちに伝えたいことは，⑴具体的に，自分がおもしろいと思える現象や事実を見出していくこと，⑵その現象を意味づけるのに十分な知識と思考力を培うことの重要性だ。この二つは，両者とも論文執筆に欠かせない。中でも特に“おもしろい”と感じる感覚を大事にしてほしい。最初は“何となく不思議だなぁ”と感じるだけでもいいし，尊敬している先生や先輩が“おもしろい”とおっしゃる感覚を引き写すのでもよいだろう。自分にとって，心惹かれるものが存在することが大切なのだと思う。そして，その問題意識を「他者」と共有し，議論し，深めていこう。その過程で，徐々に“おもしろい”と感じる感覚が確信となり，かけがえのない自分のテーマが形作られていくことを実感している。

注

１）瀬野由衣・加藤義信．（2007）．幼児は「知る」という心的状態をどのように理解するようになるか？：「見ること―知ること」課題で現れる行為反応に着目して．*発達心理学研究*，**18**，1-12.
２）瀬野由衣．（2008）．幼児における知識の提供と非提供の使い分けが可能になる発達的プロセスの検討：行為抑制との関連．*発達心理学研究*，**19**，36-46.
３）子安増生・木下孝司．（1997）．心の理論研究の展望．*心理学研究*，**68**，51-67.